

第 1 県土の現況

【県土の特徴】

1 自然的特徴

(1) 位置及び面積

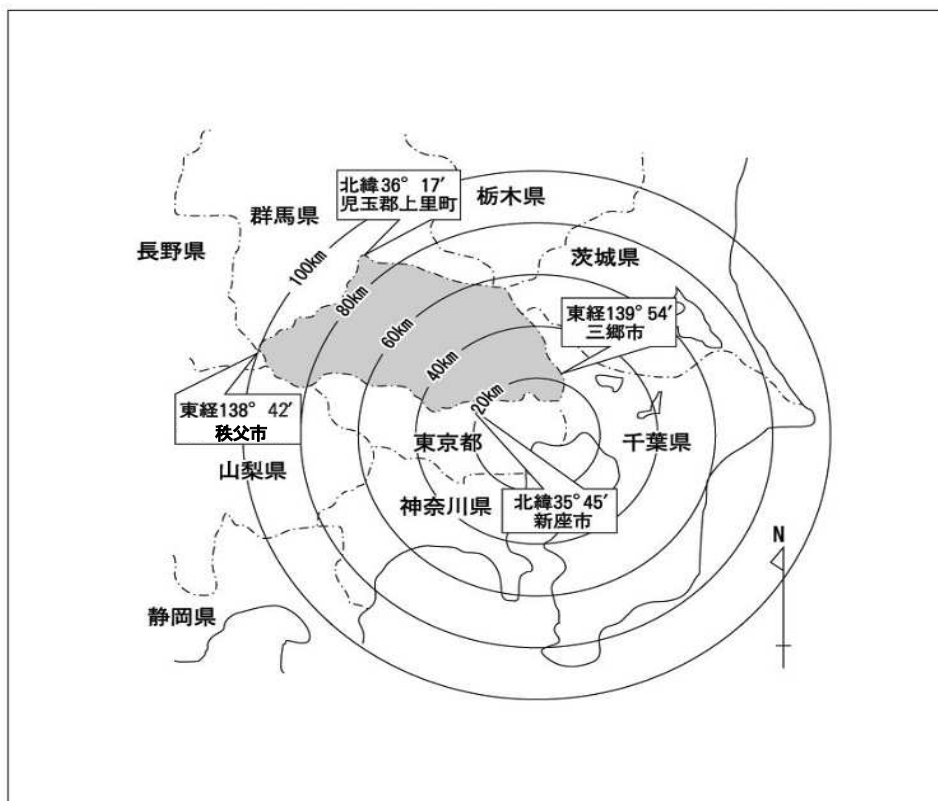
埼玉県は、40市22町1村からなる関東の中西部に位置する内陸県で、東京都をはじめとする1都6県に隣接し、全域が都心から約100kmの圏域に含まれる。また、面積は約3,798km²で国土の約1%に当たり、全国で39番目の広さである（図表1－1）。

【参考】資料1－1 市町村別人口・面積

全国都道府県市町村別面積調

(<https://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO-title.htm>)

図表 1－1 埼玉県の位置



(2) 地 勢

地勢は、西部の山地、中央部の丘陵と台地、東部の低地に大別される。

西部地域は、秩父中・古生層、第三紀層、長瀬系結晶片岩等からなる山地であり、ほぼ中央に第三紀層の丘陵と台地からなる秩父盆地がある。本県の最高峰である三宝山（2,483m、長野県境）をはじめ2,000m級の山々が連なり、甲武信ヶ岳（2,475m、山梨・長野県境）に始まる荒川は、大洞川、中津川等を集め、秩父山地を侵食し、深い溪谷を造って秩父盆地に至り、さらに赤平川等を合わせて大里地方へと流下している。

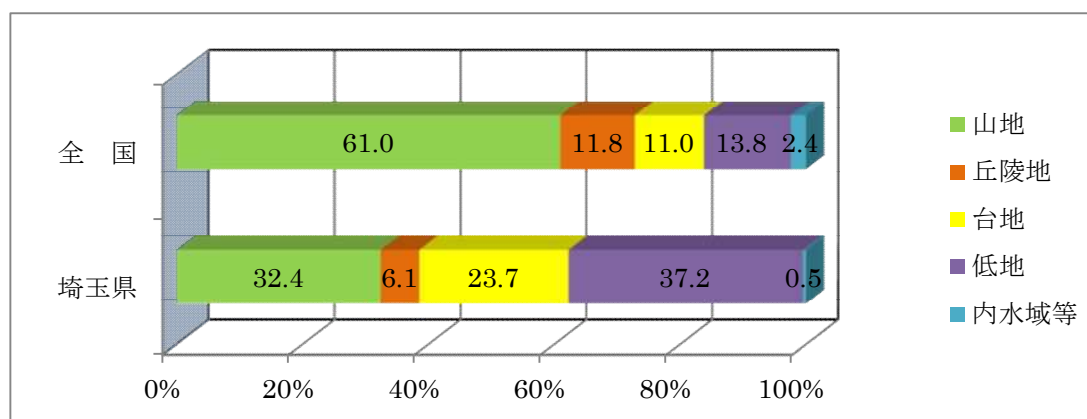
中央部地域は、秩父山麓に走る古い断層の「八王子構造線」を西の境、神流川及び利根川を北の境として、松久、比企、加治、狭山等の丘陵、それに続いて北武蔵、入間、武蔵野等の台地が広がっている。これらの台地は、古い火山灰が堆積した関東ローム層で覆われており、その中を小山川、荒川、都幾川、越辺川、高麗川、入間川等が流れている。

東部地域は、中央部地域に続く大宮台地等もあるが、海拔20m以下の沖積低地、海拔0mに近い荒川低地、中川低地が一面に広がり、その中を中川、大落古利根川、元荒川、綾瀬川、芝川等が流れている。

本県を地形区分別にみると、山地及び丘陵地の占める割合は小さく、全国の割合の半分程度で、逆に、台地及び低地の占める割合は大きい。

地形区分は、地理的に見るか地質的に見るかによっても若干の相違があるが、おおよそ台地及び低地の計を平地として算出してみると、本県の平地の面積は約2,300km²で、全国で11番目の広さであり、県土に占める平地の割合は約61%で、茨城県の約64%に次いで全国で2番目に高い割合である（図表1－2）。

図表 1－2 地形別面積割合



【参考】資料 1－2 県土の地形区分別面積

日本の主な山岳標高—日本の山岳標高一覧（1003山）—（国土地理院）

(<https://www.gsi.go.jp/kihonjohochousa/kihonjohochousa41139.html>)

都道府県、地形、傾斜度別面積(第六十五回日本統計年鑑 平成28年 総務省統計局)

(<https://www.stat.go.jp/data/nenkan/65nenkan/01.html>)

(3) 気 候

本県の気候は、夏は高温多湿、冬は低温乾燥の内陸性の太平洋側気候である。熊谷における年平均気温は約17.2℃、年間降水量は約1213.5mmとなっている（令和6年）。

夏は日中高温になり、雷の発生が多く降ひょうも多い。冬は北西の季節風が強く、晴天の日が多く空気が乾燥する。梅雨と秋霖（しゅうりん）の頃は曇りや雨の日が多く雨季のような状況となる。

地形、海拔などを考慮すれば、北部をはじめとして大部分は内陸性であるが、南部の平地では沿岸の気象特性が加わり、秩父地方の山地では盆地型の気候や山岳気候となる。

【参考】気象庁 過去の気象データ

(https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/annually_s.php?prec_no=43&block_no=47626&year=&month=&day=&view=p1)

埼玉県の気候の特徴(熊谷地方気象台)

(<https://www.jma-net.go.jp/kumagaya/shosai/chishiki/tokutyou.html>)

(4) 動植物等

本県は、原生林を残す奥秩父の山々や武蔵野の雑木林、低湿地に広がる水田など、変化に富んだ地形と豊かな自然に恵まれ、多様な野生動植物が生息・生育している。

自然植生（人手が加わらない自然本来の植生）は、気温（緯度に大きな差のない本県では主に標高）や降水量によって変化し、低地から台地・丘陵、標高250m～550m前後までの低山下部にかけての広い範囲が暖温帯（照葉樹林が中心となる植生帯）となっている。そこから標高650m前後までの低山は内陸性の中間温帯（暖温帯の要素も冷温帯の要素も少ない「すき間」の植生帯）であり、さらに1,600m前後までの山地は冷温帯（落葉広葉樹林が中心となる植生帯）、1,600m以上の亜高山は亜寒帯（常緑針葉樹林が中心となる植生帯）となっている。

低地部の多くは農地や市街地として利用されているが、河川の流路跡を起源とする沼や水路なども多く、周辺には湿地も残されており、希少植物の生育地として貴重な存在である。台地や丘陵にはクヌギやコナラ等を植栽して仕立てた雑木林が広がり、暖温帯の代表であるカシ類、スダジイ等の照葉樹林は社寺などにわずかに残るだけである。

中間温帯には、モミ・ツガ、アカマツ等の常緑針葉樹林、クリ・コナラ、イヌシデ等の落葉広葉樹林など多様な植生が見られるものの、スギ・ヒノキの人工林やコナラ等の天然林（二次林）が多くなっている。

冷温帯では、スギ・ヒノキ、カラマツ等の人工林が広い面積を占め、ブナ・イヌブナ、ミズナラ、サワグルミ・シオジ等の天然林がまとまって残されている場所は、秩父地方の一部に限られる。

亜寒帯は県土に占める面積は狭いものの、県内の森林の中で最も自然状態が保

たれ、コメツガ、シラビソ・オオシラビソ等の常緑針葉樹が優占する原生林が残されている。

県内生育の在来植物は約5,600種とされ、うち維管束植物は約2,300種となっている。県内在来動物は約12,400種とされ多くは昆虫類等の無脊椎動物である。

近年の急激な都市化の進展によって生じる様々な自然環境の変化が、野生動植物に大きな影響を及ぼしており、県のレッドデータブックでは、植物1,113種、動物842種を絶滅のおそれがある種としている。

ニホンジカやイノシシ等一部の野生動物の個体数が増加し、生息地域の森林生態系に被害が生じていることや、ブラックバスやアライグマ等外来生物が増加していることによる生態系への悪影響も懸念されている。

県内の生物多様性の保全と回復を目指し、野生動植物とそれらを育むこの豊かな自然環境が将来にわたって受け継がれるよう、自然と共生する県土づくりが求められる。

県のシンボルとして、昭和40年にシラコバトが「県民の鳥」に、昭和41年にケヤキが「県の木」に、昭和46年にサクラソウが「県の花」に指定され、続いて平成3年にはミドリシジミが「県の蝶」、ムサシトミヨが「県の魚」に指定されている。

また、「越ヶ谷のシラコバト」（地域を定めず）、「宝蔵寺沼ムジナモ自生地」（羽生市）、「田島ヶ原サクラソウ自生地」（さいたま市）、「元荒川ムサシトミヨ自生地」（熊谷市）や「大山沢のシオジ林」（秩父市）など、国や県の天然記念物として保護されているものもある。

さらに、秩父地域は日本地質学の発祥地といわれ、地質学上非常に名高いところであり、ジオパークの取組も進められている。荒川河川敷に広がる岩畳（長瀬町）などは特に有名である。本県の鉱物資源としては、セメント等の原材料として石灰岩が、他に硬質砂岩や山砂利等も採掘されている。

【参考】資料1－3 天然記念物

埼玉県ホームページ 埼玉県内の国・県指定等文化財

(<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2216/bunkazai-kensu.html>)

(5) 自然災害

ア 洪水氾濫

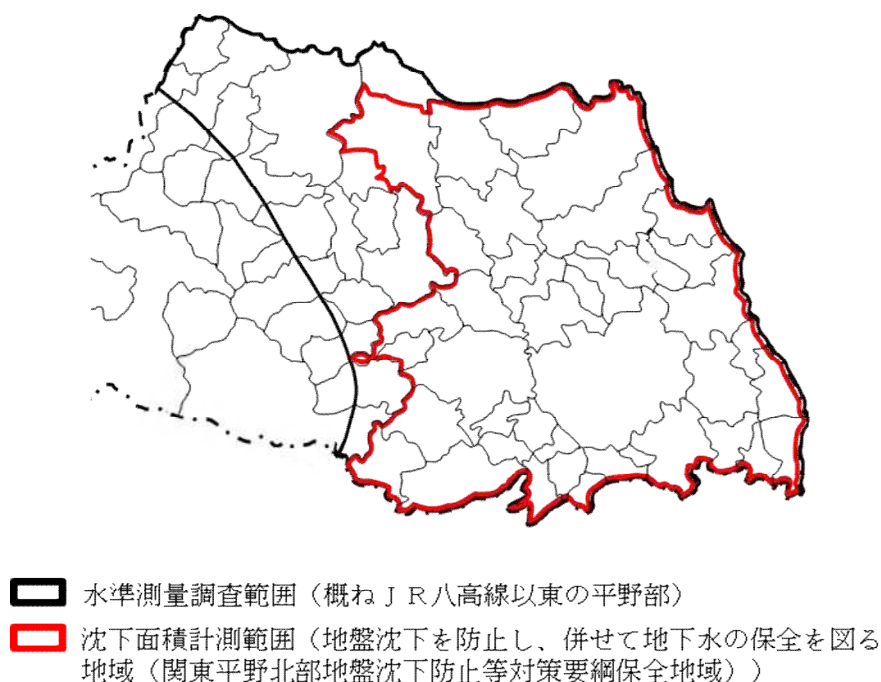
本県の河川はいずれも利根川水系又は荒川水系に属しており、山地や台地・丘陵地、低平地など県内各地の地形に応じて、河川からの氾濫や河川に流れ込む前の内水により、県内全域において浸水被害が発生している。

これまでの治水対策の効果として、過去の同規模の洪水時よりも被害が小さくなる傾向はあるものの、気候変動の影響により水災害が激甚化・頻発化しているほか、浸水が想定される区域に人口・資産が集中しており、令和元年東日本台風の際など近年も多くの浸水被害が発生している。

イ 地盤沈下

地盤沈下は、広い範囲にわたり地盤が沈んでいく現象で、地下水の過剰な汲み上げが主な原因である。本県では、地下水の採取規制及び地下水から表流水への水源転換等の対策により、地盤沈下が沈静化しつつあるが、一部の地域では依然として地盤沈下が観測されている（図表 1－3）。

図表 1－3 地盤沈下調査地域区分図



ウ 液状化

地下水を含んだ砂質地盤は、地震発生に伴い液状化が起こり、建造物が倒壊するなど、大きな被害を受ける恐れがある。

本県の中川・荒川流域及び利根川中流域では、関東大地震（1923年・大正12年）、西埼玉地震（1931年・昭和6年）及び東北地方太平洋沖地震（2011年・平成23年）

などが発生した際には、様々な地域において液状化が発生した。また、埼玉県地震被害想定調査（平成24・25年度）における液状化可能性分布図でも同様の傾向がうかがえる。

【参考】埼玉県地震被害想定調査被害分布

(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0401/higaisoutei/index.html>)

エ 土砂災害

本県では、地震や降雨などによる土砂災害のおそれがある区域を土砂災害警戒区域として5,237区域指定している。県内の土砂災害警戒区域は、西部の山地、丘陵地に多く分布しているほか、大宮台地の周縁部の斜面など南部、東部の都市部にも点在している。

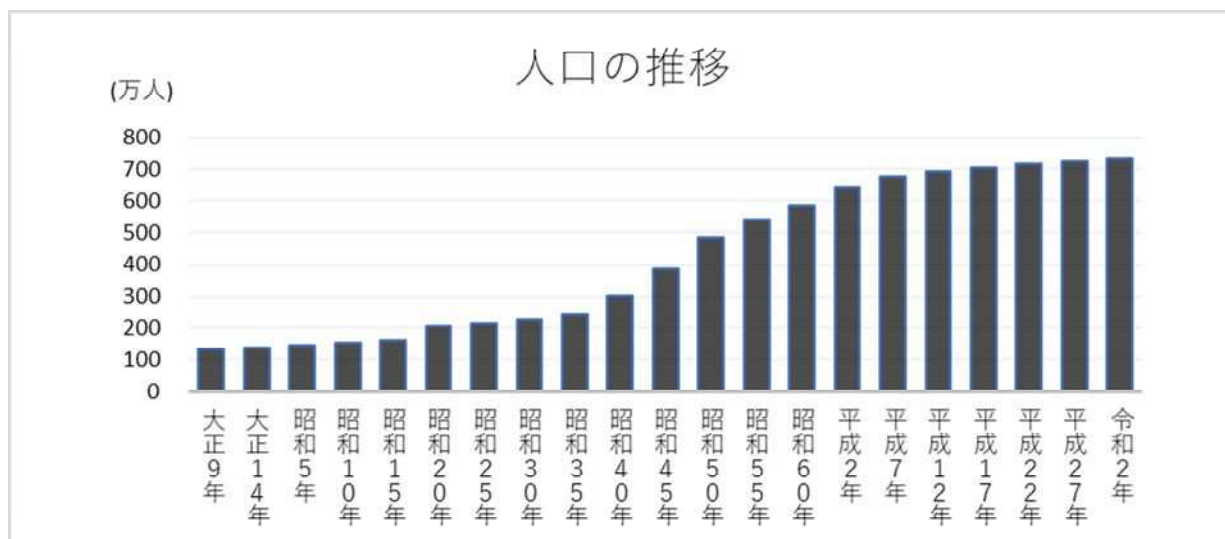
本県ではカスリーン台風以降、土砂災害による人的被害は発生していないが、近年でも土砂災害は発生しており、県民生活への影響や財産等への被害が生じている。特に、令和元年東日本台風では、県西部の山地だけでなく、県南部の斜面など県内の広い地域で土砂災害が発生している。

2 人口動向及び交通

(1) 人口動向等

本県の人口は、昭和30年代後半から平成2年にかけて急激に増加し、その後、増加のペースは緩やかになったが、平成17年の国勢調査では700万人を超え、令和2年には約734.4万人となっている（図表1－4）。

図表1－4 埼玉県の人口の推移



資料：令和2年国勢調査結果（統計課）

一方、令和3年10月1日現在の推計人口において、統計開始以来初めて減少に転じており、令和7年4月1日現在の推計人口は約732.1万人、世帯数は約334.0万世帯（一世帯当たり約2.2人）となっている。

市町村別の推計人口をみると、人口50万人以上は、さいたま市、川口市の2市、30万人以上は、川越市、所沢市、越谷市の3市、20万人以上は、春日部市、上尾市、草加市の3市、10万人以上は、熊谷市、加須市、狭山市、鴻巣市、深谷市、戸田市、入間市、朝霞市、新座市、久喜市、富士見市、三郷市、ふじみ野市の13市である。また、40市で県人口の約93.6%を占め、1市当たりの平均人口は約171,265人、1町村当たりの平均人口は約20,454人である。

なお、本県の人口規模は東京、神奈川、大阪、愛知に次いで全国で第5位である。

【参考】資料1－1 市町村別人口・面積

資料1－4 県人口の推移

国勢調査(<https://www.pref.saitama.lg.jp/kense/toke/kokuse/index.html>)

埼玉県推計人口(<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/03suikei/908-20100112-1518.html>)

(2) 交 通

本県の鉄道網は、ＪＲ東日本９路線、東武鉄道５路線、西武鉄道５路線、東京地下鉄１路線、秩父鉄道１路線、埼玉新都市交通１路線、埼玉高速鉄道１路線、つくばエクスプレス１路線により形成されている。

乗合バスの路線網は、東武バス、西武バス、国際興業等により形成されている。

本県における道路法上の道路延長（高速自動車国道を除く。）は、実延長で見ると、令和６年４月１日現在、47,264km（一般国道1.8％、県道5.2％、市町村道93.0％）であり、他県と比較すると、全国第５位（令和５年３月31日現在）の道路延長である。

高速道路は、東京から放射状に延びる関越自動車道、東北自動車道、常磐自動車道と東西方向の東京外環自動車道、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）によるネットワークが形成されている。

また、新大宮上尾道路（与野ＪＣＴ（仮称）～上尾南出入口（仮称）区間）及び東埼玉道路（外環道～浦和野田線ＩＣ（仮称）区間）が事業化され、ネットワークの更なる充実が進められている。

【参考】資料１－５ 道路法上の道路延長の推移

【土地利用の現状】

1 土地利用の動向

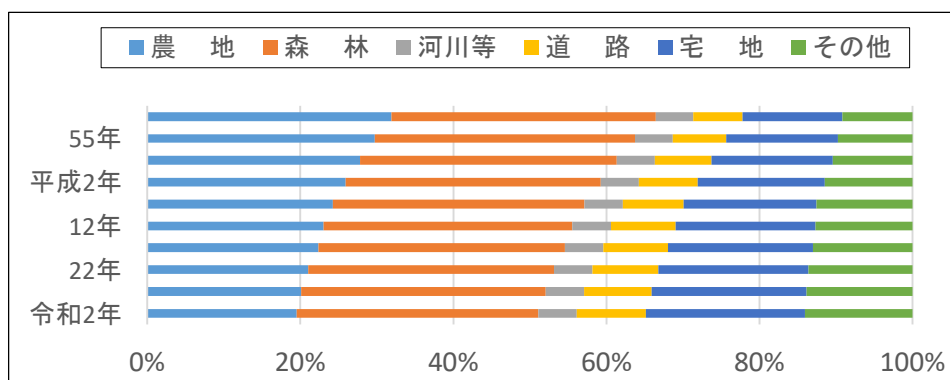
令和5年における県土の利用形態をみると、県土面積約3,798km²のうち、おおよそ、農地が19%、森林が31%、水面・河川・水路が5%、道路が9%、宅地が21%、その他が14%で、農林地の面積が、県土の51%を占めている。また、本県の可住地面積は、2601.6km²（県土の68.5%）で、全国の可住地面積比率（33.0%）の約2倍、大阪府（70.0%）に次ぐ高い比率となっている。（図表1－5）。

【参考】資料2－1 埼玉県国土利用計画における土地利用面積の推移

「統計でみる都道府県のすがた 2025」（総務省統計局）

(<https://www.stat.go.jp/data/k-sugata/naiyou.html>)

図表1－5 利用形態別土地利用の推移



単位:km²

	昭和 55年	60年	平成 2年	7年	12年	17年	22年	27年	令和 2年	5年	区分の説明
農地	1,128	1,055	984	922	874	848	798	763	741	730	田・畑の合計
森林	1,291	1,273	1,264	1,246	1,234	1,223	1,219	1,212	1,199	1,192	国有林及び民有林の合計
原野等	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	原野・採草放牧地の合計
河川等	187	188	190	189	191	190	191	192	191	192	水面・河川・水路の合計
道路	265	276	291	302	321	321	328	335	342	344	一般道路・農道・林道の合計
宅地	553	588	631	660	694	719	744	768	790	800	住宅地・工業用地・その他宅地の合計
その他	371	416	435	476	481	494	516	525	533	538	

資料:土地利用現況把握調査(土地水政策課)

※区分は、国土利用計画の利用区分による。

※平成23年から地目区分を変更し、従来の「採草放牧地」、「原野」の区分を統合し、「原野等」とした。

※平成12年、平成17年、平成22年、平成27年、令和2年の森林面積は推計値

本県の土地利用を大まかに分けると、県の西部が森林、北部及び東部・中西部の一部が農用地、南部が宅地に区分される。市街地は、都心から放射状に延びた鉄道に沿って拡大している。

鉄道網、道路網の整備に伴う交通利便性、生活利便性の向上や経済社会諸活動の拡大により、森林及び農用地が減少し、宅地が増加している。

人口増加が著しかったことから、都市の基盤整備が不十分のまま都市化されていることや、水田等の大規模転換により、遊水機能が低下していることなど、適正かつ計画的な土地利用を図る上で問題を抱えている。特に、県土の約19%を占める市街化区域のうち、基盤整備等が必要な地域においては、土地区画整理事業等の面的整備事業や河川改修等を促進するなど、居住水準と安全性を高めることが必要となっている。

【参考】資料 1－6 県内市町村の土地利用規制状況①

2 利用形態別土地利用

(1) 農地

本県は、西部の山地を除き台地から低地にかけて農地が広がっており、耕地率は約19%である。

台地は、すべて黒ボク土壌群で普通畑・樹園地として利用されているものが多い。低地は、北部及び東部地域は利根川から、中部地域は荒川及びその支流から由来した沖積土で形成され、概ね褐色低地土又は灰色低地土の分布が多く、その他に細粒グライ土壌、黒泥土壌、泥炭土壌が分布しており、その土壌生産力が高い。

江戸時代に行われた見沼代用水、葛西用水、野火止用水等の開削や新田開発等から近代に至る用排水路の整備等による農地の拡大と、さらに大消費地である東京に隣接するという地理的特性等もあって、台地丘陵地域には畑作地帯、低地には水田地帯がそれぞれの地域の特色を生かしながら広がった。しかし、昭和30年代後半以降の急速な都市化の波は、従来の農業環境を大きく変貌させることとなり、住宅地、工業用地等への転用により農地は減少した。

さらに、食生活の変化、稲作技術の向上等により全国的に米の供給が過剰となったことから、麦、大豆、飼料作物、野菜等の生産を拡大すべく、昭和46年度からは本格的な水田利用の再編成が行われた。

このような状況の中で、農産物の供給基地として優良農地を確保し、積極的に整備を図ることや、農地が発揮する多面的機能の観点から、その計画的な保全を図ることが求められている。

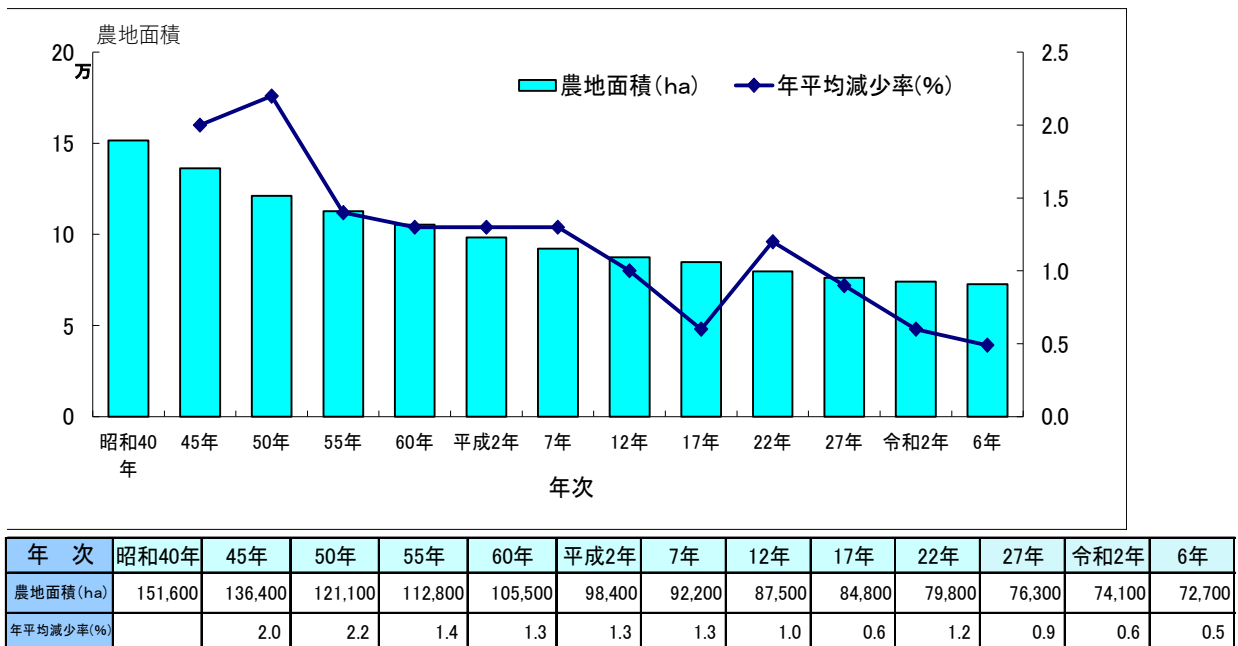
ア 農地面積の推移

農林水産省の調査によると、農地面積は、昭和40年は151,600haであったが、その後年々減少を続け、特に昭和45年から50年にかけての減少率は年平均で2%を超えるなど、大幅に減少した。

しかし、開発規制の強化や経済情勢の変化等に伴い、昭和50年以降は減少率が鈍化し、平成27年から令和2年にかけては年平均で0.6%、令和2年から令和6年にかけては0.5%となっている(図表1-6)。

【参考】資料1-7 農地面積の推移

図表1-6 農地面積及び農地面積の減少率の推移



資料：耕地及び作付面積統計（農林水産省）

イ 農地転用状況

農地の権利移動・借賃等調査により令和4年の農地転用状況を見ると、農地転用面積は704haであり、前年に比べ8ha減少している。

用途別では、住宅用地が44.4%を占め、次いでその他の業務用地(駐車場など)が38.4%となっている(図表1-7、1-8)。

なお、市街化区域内の農地転用面積を見ると、令和4年は306haであり、前年に比べ13ha減少した。また、県全体の農地転用面積に対する割合は43.5%を占めている。

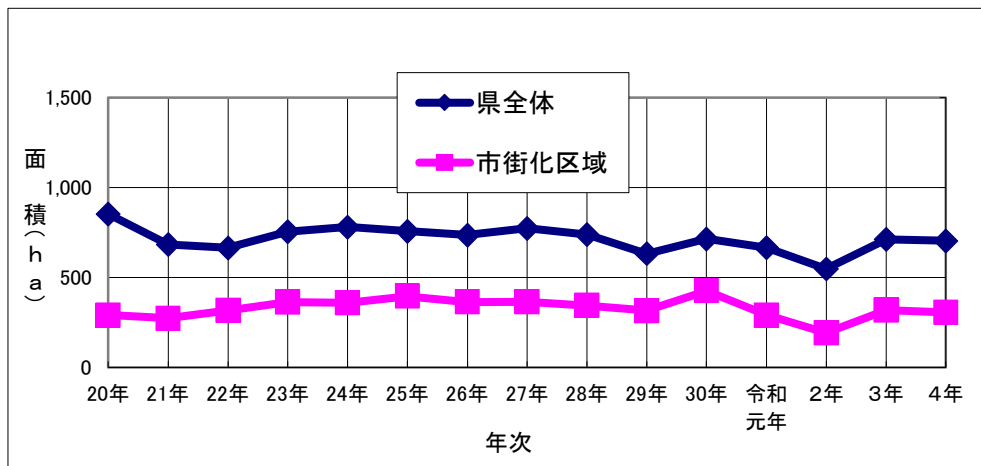
【参考】資料1-6 県内市町村の土地利用規制状況②

資料1-7 農地面積の推移

資料1-8 用途別農地転用状況

図表 1－7 農地転用面積の推移

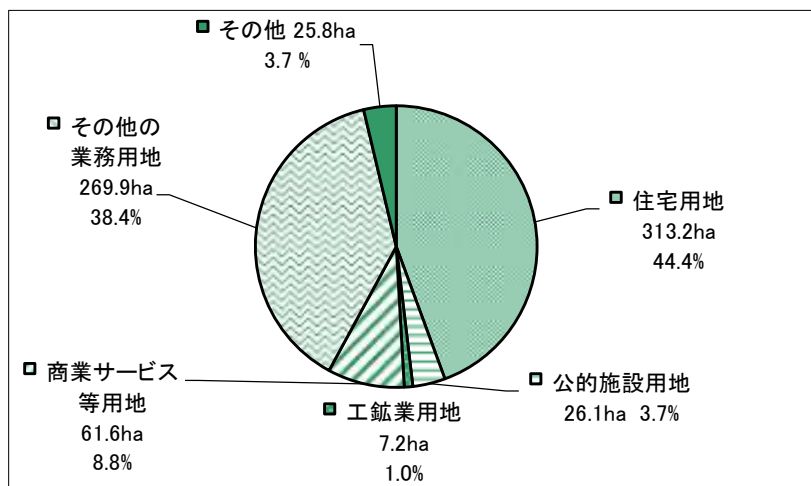
図表 1－8 農地転用面積の推移



資料：農地の権利移動・借賃等調査（農林水産省）

※R 4は農業政策課調べ

図表 1－8 令和 4 年農地転用の用途別構成割合



用途	住宅用地	公的施設用地	工鉱業用地	商業サービス等用地	その他の業務用地	その他
面積 (ha)	313.2	26.1	7.2	61.6	269.9	25.8
割合 (%)	44.4	3.7	1.0	8.8	38.4	3.7

資料：農業政策課調べ

ウ 採草放牧地

採草放牧地は、世界農林業センサス林業調査報告書（農山村地域調査報告書）の「森林以外の草生地（野草地）」の面積として把握していた。平成22年世界農林業センサスより「森林以外の草生地（野草地）」が調査項目から外れたため、平成23年から採草放牧地と原野を合わせた「原野等」の面積として把握している。

【参考】資料2-1 埼玉県国土利用計画における土地利用面積の推移

(2) 森林

本県の森林面積は、119,223haで県土の約31%を占めている。所有形態別で見ると、国有林が約10%、民有林が約90%を占める。民有林の人工林率は約54%で、その多くが、木材として利用可能な時期を迎えた林分である。

また、本県の森林のほとんどは、スギ、ヒノキ等の針葉樹及びクヌギ、コナラ等の広葉樹が主体であるが、秩父市（旧大滝村）の奥山にはシラビソ等の亜寒帯系の森林、県南部の丘陵にはアラカシ等の暖帯系の森林も存在する。地味はおおむね肥沃であり、林木の成長に適しているため、スギ、ヒノキ等の植林が続けられてきた。特に、300年余の伝統を持つ飯能市を中心とした西川林業地域は、集約的施業による優良材の生産地として有名である。

森林は、木材等の林産物の供給、水源涵養、国土保全等の機能の発揮を通じて、県民生活と深く結びついてきた。近年では、国際的な温暖化対策の取組においても、二酸化炭素の吸収・貯蔵等の森林の機能が特に重視されている。

以上のことから、間伐等の森林整備を引き続き行い、皆伐・再造林や県産木材の利用拡大の取組を進め、森林を適正に維持管理することで、森林の持つ多面的機能を持続的に発揮させることが肝要である。

ア 森林面積の推移

昭和49年から昭和58年までの10年間では森林がゴルフ場の造成や宅地開発などへの転用により3.2%減少した。

その後は、ゴルフ場の造成等の大規模な転用は次第に減少し、住宅用地や工場用地等の事業用地への転用により森林が減少した。また、最近では、太陽光パネルの敷設用地等の転用件数も散見され依然として森林は減少傾向にある。

なお、平成27年から令和6年までの最近10年間の減少率はおよそ1.7%と、比較的緩やかな減少傾向で推移している。

【参考】資料3-8 森林面積の推移

イ 森林の転用状況

平成27年度から令和6年度の直近10年間で林地開発により森林が転用された面積は約214haで、主な転用は工場・事業場（太陽光発電施設含む）となっている。また、同様に直近10年間で保安林の解除面積は約6haで、主に事業用地や道路用地などへの転用に伴う解除で、解除された保安林の種類は多岐に渡っている。

なお、保安林は森林の持つ公益的機能を維持増進させるため、指定も行っており、直近10年間の保安林面積は約174haの増となっている。

【参考】資料 3－9 林地開発許可状況

資料 3－10 保安林の種類別面積

資料 3－11 保安林種別保安林解除実績

(3) 原 野

原野面積については、世界農林業センサス調査報告書の「森林以外の草生地」から「採草放牧地」又は「国有林に係る部分」を除いた面積として把握していた。

平成23年以降は「森林以外の草生地」から「国有林に係る部分」を除いた面積を、採草放牧地と原野を合わせた「原野等」の面積として把握している。

(4) 水面・河川・水路

水面・河川・水路の面積は、令和5年度末現在で約192km²となっており、およそ、水面が7%、河川が79%、水路が14%を占める。

水面のうち大きいものは、滝沢ダム、浦山ダム、合角ダム、有間ダム、荒川調節池、権現堂調節池、山口貯水池（狭山湖）、二瀬ダム、玉淀ダムである。

河川は、利根川水系と荒川水系に分けられ、荒川水系が一級河川の総延長（右岸、左岸の合計）3,343kmのうち約59%、流域面積の約66%を占めている。浸水被害の軽減、解消のため、今後も積極的な河川改修が必要である（図表1－9）。

【参考】資料 1－9 水資源開発施設

資料 1－10 一級河川数及び流域面積

資料 1－11 水系別一級河川延長

資料 1－12 水道の取水状況別供給量

資料 1－13 河川敷の占用状況

資料 2－1 埼玉県国土利用計画における土地利用面積の推移

図表 1－9 埼玉県河川図



資料：河川砂防課 平成25年5月作成
平成29年8月追記

(5) 道 路

道路は、道路法上の道路のほか、農道及び森林管理道などがある。道路面積は、昭和60年には276km²（県土の約7.2%）であったが、道路の整備が進み、令和5年には約344km²（同約9%）に増加している。

埼玉県道路整備は、交通渋滞解消などを目的に昭和30年代から重点投資を行い、道路ネットワークを着実に充実させてきた。一方、橋梁などの膨大な道路ストックが今後、急速に老朽化し、一斉に大規模な修繕や更新の時期を迎える。また、少子高齢化による社会構造の変化や経済活動の広域化、国際化など、時代の潮流に的確に対応した道路整備が求められている。

【参考】資料1－5 道路法上の道路延長の推移

資料2－1 埼玉県国土利用計画における土地面積の推移

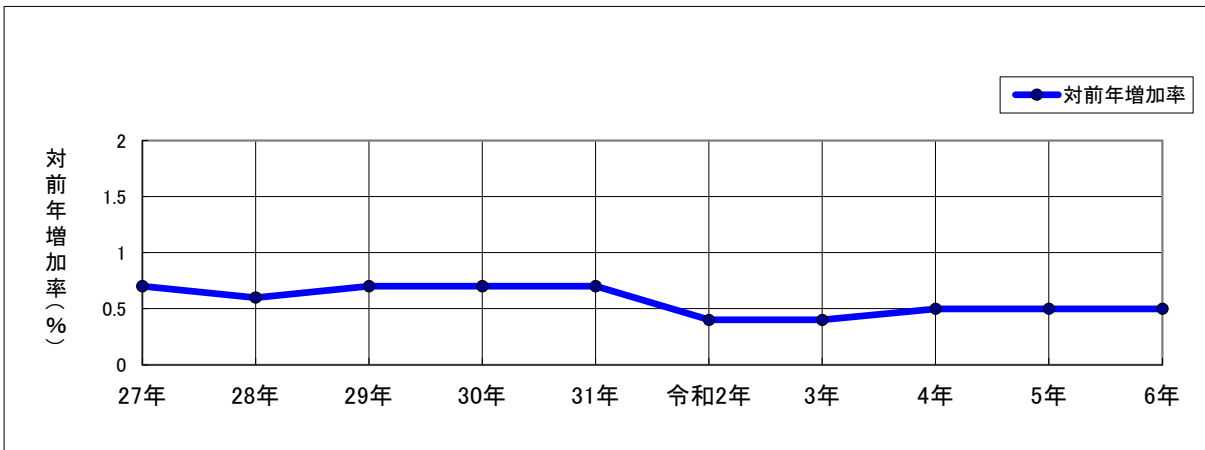
(6) 宅 地

ア 宅地面積の推移

「固定資産の価格等の概要調書」によると、宅地面積は、令和6年現在、県土の約21%に当たる76,512haである。伸び率は、ここ数年は0.5%程度で推移している(図表1－10)。

【参考】資料1－14 埼玉県の宅地総面積の推移

図表1－10 宅地面積の対前年増加率の推移



年 度	各年1月1日現在									
	27年	28年	29年	30年	31年	令和2年	3年	4年	5年	6年
対前年増加率	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5

資料：固定資産の価格等の概要調書（市町村課）

イ 開発許可動向

都市計画法に基づく開発許可申請の件数は、平成27年度から令和6年度までの10年間で合計約3万6千件であった。

【参考】資料1-15 開発許可申請件数の推移

ウ 宅地の利用区分の状況

本県の住宅地面積は、令和5年現在で約548km²あり、県土の約14%を占める。

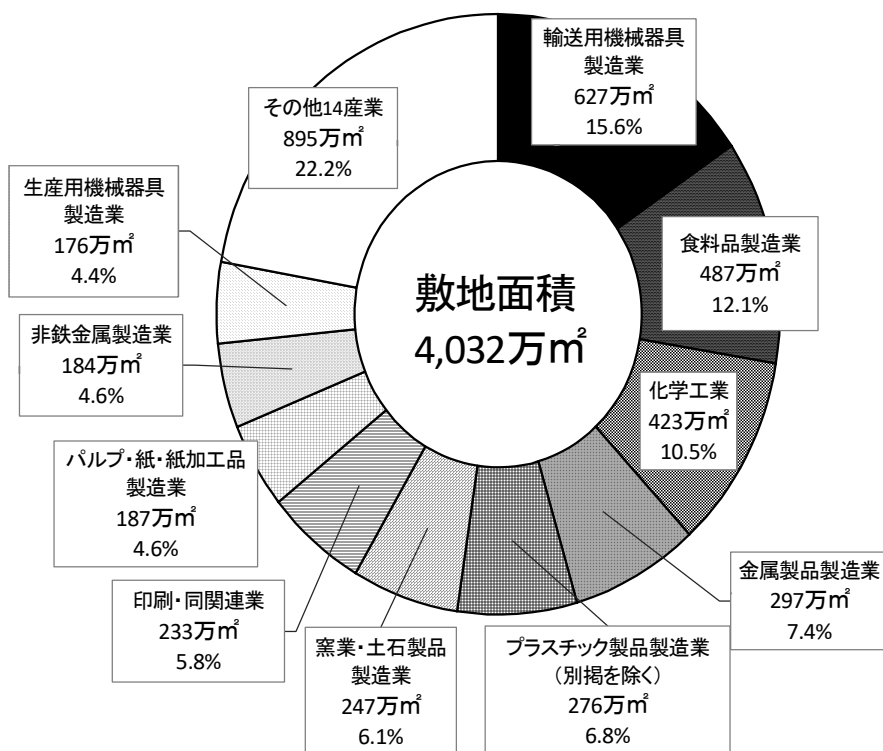
「住宅着工統計」によると、本県の新設住宅着工戸数は年間6万戸から7万戸で推移していたが、平成21年に5万戸台に落ち込んだ。その後は6万戸前後で推移していたが、令和元年に約5万戸、令和2年は4万戸台に落ち込み、令和3年以降は約5万戸となり、令和6年は51,488戸であった。

本県の工業用地面積は、「令和3年経済センサス活動調査」によると、従業者30人以上の事業所敷地面積で約40km²となっており、その内訳は、輸送用機械器具製造業が15.6%と最も広く、食料品製造業が12.1%、化学工業が10.5%と続いている(図表1-11)。

【参考】資料2-1 埼玉県国土利用計画における土地利用面積の推移

経済センサス活動調査 (<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/a091/cc03.html>)

図表1-11 敷地面積の産業分類別面積、構成比



資料：令和3年経済センサス活動調査 産業別集計（製造業）（2021年）（統計課）

注）従業者30人以上の事業所

また、「令和３年経済センサスー活動調査」によると、牛乳小売業（宅配専門）、自動車小売業（新車・中古）、建具小売業、畳小売業、ガソリンスタンド及び新聞小売業（宅配専門）等の事業所を除く法人組織の小売業の売場面積は約719万㎡となっている。

【参考】資料１－１６ 住宅地面積の推移

資料１－１７ 着工新設住宅の動向

資料１－１８ 着工新設住宅利用関係別動向

資料１－１９ 事業所数及び敷地面積等の推移（製造業）

資料１－２０ 事業所数・従業者数（商業）

経済センサスー活動調査（<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/a091/cc03.html>）

（７）市街地

市街地（国勢調査でいう人口集中地区、D I D）は、令和２年国勢調査においては717.04km²であり、県土の18.9%を占める。市街地面積の広い市町村は県南地域に集中しており、40km²以上あるのがさいたま市、川口市の２市、30km²以上40km²未満が川越市、越谷市、所沢市の３市、20km²以上30km²未満が上尾市、草加市、春日部市、熊谷市、狭山市の５市である。

【参考】資料１－２２ 市町村別都市計画区域の指定状況及び人口集中地区(DID)面積

（８）その他

その他の土地利用としては、令和５年で538km²あり、鉄軌道用地、供給（上下水道）・処理施設（ゴミ処理場・火葬場等）用地、公園用地、基地用地等の公共施設用地、ゴルフ場用地、墓園用地等があげられる。

【参考】資料１－２１ ゴルフ場開設動向

資料２－１ 埼玉県国土利用計画における土地利用面積の推移